

と信するなり一体詩や歌にても其意味の露骨なるを善とするに非ず其意味の隱微なる所に神韻の感遠なるありて以心傳心もて人を感し鬼神をも泣し

ひるに至るなり何と唯り唱歌に於て然らざらんや以上述來たる所の私見は其概略にして然も時流に逆ふの嫌ひありて恐くば大方諸氏の笑を招かんと幾度か躊躇せしも退て思ふに是れ斯道に忠なる所以に非すと且つ古言にも疑しきは問んことを思ふとわれは聊か是の疑點を擧て大方の教を請ふ

備後の毬歌

備後 佐藤 龜 一

●べにやのおかざの。うめものは。むつてもむつても。ようそまる。とんばにみづひき。みづくる

ま。みづがないとておえとまで。おえとながま。こしかけて。こどもつさんこどもつさん、こはなんちうところかへ。こはしなの。せんこうじ。うめとさくらをわけまして。うめはすいすい。もとされて。さくらはさいさい。ほめられた。

●あんなこともしうと。こんなこともしうと。いせへまいるいふて。いせのこみぞで。いかをひろうて。やいてかんがらかふて。たなべふちやけて。ねこがとてくて。ねこをばふいふて。あちのはしらで。あたまこつこつ。なわまいだ、なわまいだ。

我が地方の毬歌

相模 平 岩 繁 治

五つ六に、七八九十や、十二三十四の、れてまんなさむろく、おかしはしろかね、きよ——ろくる

くまで、七十一二三四、八十一二三四、九十つ
 たらはうしゆや、ほまめや、ほうしゆや、かぐら
 や、ちいとおんまるめで、これで一かんよせ、お
 てさんむろく、おかしわしろかね、……(とまへの
 如くつづきちよいとおんまるめでこれで二かんよ
 せ三かんよせとついでのであります)

同

同

うけ——とつた、うけ——とつた、これから、ど
 なたにおさ——しもうす、むこうえめいやる、お
 こうしづくしの、しろかべづくしの、あかいのれ
 ん、をさぞへか、つた、しとやのないのに、たれ
 におわたしもうす——ぞ、それからおひとがない
 とて、あざのあざづき、てうちんにてうで、たい
 まつ三ぼんで、やらかした、く、またあとさぬ
 よーにうけとらしよ、く



端午の話

せく生

年中行事の中、古來最面白く又最盛に行は
 れつゝあるものを選出して、これまで語り來つた
 例によりまして、今度の語草には、五節句の一で
 ある端午を話す事に定めたのであります。扱この
 五月五日は端午といふが、彼の重陽を名つける
 九月九日の節句を重九といふと同じ様に、亦重五
 とも申すのであります。この端午の節句には、菖
 蒲草を大切な節物としまして、家々の檐端はこの